

大津 歴博 だより

2004
No.54

新収蔵品紹介 近江八景画卷



近江八景画卷 桃田柳栄筆 貞享元年（1684） 1巻 本館蔵



大津市歴史博物館

近江八景画巻——作品の検討——

●近江八景作品としての由緒の正しき

本作品は、貞享元年（一六八四）四月焼失の東宮御所を再建するにあたって、御所の常御殿にしろえらる障壁画（襖絵・壁画）の構図用下絵として描かれたことが奥書に記されています。すなわち、最高の正統性と優雅さを要求される建造物に描かれた作品の下絵であるため、本作品に描かれた近江八景における描写は非常に優れています。とりわけ、雅やかで穏やかな絵柄を描きつつも、实景を踏まえ、粟津から湖南の東岸を巡り、湖西に移って三井寺・大津宿に終わる実際の地理関係に即した構図や、良質の岩絵の具を使用した上品な色使いは、その当時における八景の最良の基準作品といえます。加えて、本作品は、右大臣鷹司兼熙を筆頭として、いずれも高位の公卿が自筆によって近江八景の和歌（近衛信尹の詠歌）を書き添えた本格的な仕上げとなっており、本作品がただの下絵ではなく、当時の東宮（皇太子）にお披露目をするために制作したものであることをうかがわれます。

●制作年が判明し、しかも古い

東宮御所の再建は、同年一〇月に造営開始、翌

二年二月に竣工しています。したがって、下絵である本作品が描かれたのは貞享元年中と考えられます。これは、制作年が判明する近江八景作品としては非常に古いものです。江戸時代の前期、つまり三〇〇年以上前にさかのぼる時代に制作されたことが判明する作品は、常盤山文庫（鎌倉市）所蔵の海北友雪筆近江八景図が寛文一〇年（一六七〇）と最も古く、次いで元禄六年（一六九三）の近江八景図絵馬（長命寺蔵、近江八幡市）の二例が確認されているだけでした（制作年は不明であるものの、同時代の近江八景作品は他にもわずかだが存在します）。したがって、制作年の判明する近江八景図としては、本作品は二番目に古いといえます。

●当時の一流画家による希少な作品

幕府御用絵師のポストを寡占する狩野派体制を築き、御用絵師の頂点を極めた狩野探幽（一六〇二〜一七四）には、四天王と呼ばれた弟子が存在しました。中でも双壁として並び称されたのが久隅守景と、本作品の作者、桃田柳栄（一六四七〜一八八）です。彼は、薩摩藩の島津侯によって召抱えられた御用絵師であり、また、彼が描いたとされる狩野探幽の肖像画は、名品としてよく知られています。本作品にみる情趣豊かな彩色や優美で繊細な表現は、狩野探幽肖像画にも通じる作風とい

えるものです。ただし、桃田柳栄については残された作品が非常に少なく判断材料に乏しいという実情がありました。さらに本作品には桃田柳栄の自筆の落款（サイン）がなく、巻末の奥書に絵の作者として柳栄の名が記されているだけです。したがって作風の検討以外に、奥書の情報が確かなものであるとする根拠が必要でした。

この点については、和歌の筆者の検討で解消されました。本作品における和歌筆者の公家の中には、当時の文芸サロンの常連メンバーが少なからずおり、残された色紙や短冊などから彼らの書の特徴（筆様・書風）が確認できました。本作品においては、鷹司兼熙、花山院定誠、中院通茂、醍醐冬基らの筆様・書風と照合することができ、いずれも奥書が示す彼らの書とその特徴が一致することが確認できました。

したがって本作品は、奥書どおり桃田柳栄筆と考えて間違いないものであり、その点においても貴重で希少な作品であることがいえます。なお本作品は、同門の久隅守景の近江八景図屏風（滋賀県立近代美術館蔵）と共通する図様（唐崎から三井寺・大津宿における描写）がみられます。守景画は現在片隻分（対の片割れ分）が不明となっていますが、その全貌を考えるうえでも興味深い作品となっています。

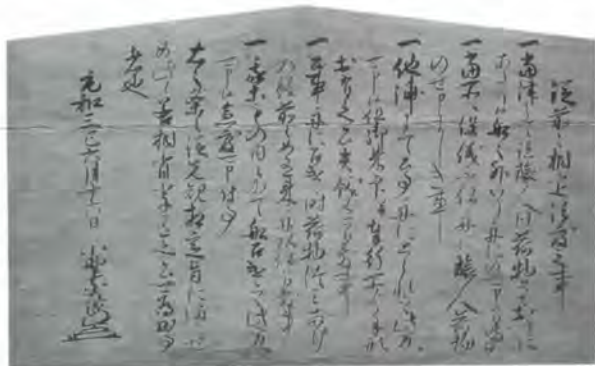
（横谷 賢一郎）

高札

■ 4月13日(火)～5月16日(日)

テレビの時代劇で、板札に法令などを墨書した高札を、群集が眺めている場面は、よく目にされているでしょう。今回のミニ企画展は、その「高札」に焦点を当てます。形は、左の写真のようなもので、本来ならこの本体上部に屋根が付いています。今回の展示では、表面にどのような文章が書かれているのかも、もちろん解説して紹介しますが、とくに注目したいのは、その高札がどのような方法で掲示されていたのかということです。

高札の表面や裏面をよく観察すると、釘穴が開いているもの、鉄サビが付着しているもの、また裏面に、建てるときに使用した支柱の痕跡が残されていたり、支柱を嵌めるための溝(蟻溝)が彫られていたりします。高札の建て方は、時代とともに工夫が凝らされるようになっていきます。本展では、先人が考え出した知恵にも注目してください。



大津百艘船高札 個人蔵

大津絵

■ 5月18日(火)～6月27日(日)

大津絵は、土産物として寛永年間(一六二四～四四)頃から東海道大津宿の大谷・追分付近で売られていました。一流の絵師ではなく、職人たちによる闊達な筆づかいと、原色を多用した鮮やかな色合いを特徴としており、画題も、滑稽で親しみやすいものや風刺を利かせたもの、教訓を織り込んだものが選ばれ、手頃な値段も手伝って、爆発的な人気を博しました。大津絵は、こうした世俗的な画題の作品が有名ですが、描き始められた頃は阿弥陀如来や十三仏などが主に描かれていたとされています。これらは大津絵仏画と呼ばれ、一枚物として描かれていた世俗画に対し、簡単な軸と紙縷の紐が付けられ、絵の周囲に、いかにも表装したように描表装が描いてありました。これは買ってすぐに掛けて使うための工夫で、大津絵仏画は土産物というより、人々の日頃の礼拝に用いられていたと考えられています。本展では、「鬼の念仏」などの世俗画に大津絵仏画も加え、大津絵の魅力を紹介します。



大津絵 鬼鼠杵 本館蔵

第41回「三」企画展

大津の古文書4 尾花川の漁業文書

■ 6月29日(火)～8月8日(日)

江戸時代の尾花川町は、幕府直轄領の大津町の西端に位置する、北国海道沿いの町でしたが、湖辺の町であったため、舟運や漁業を営み、また船大工の居住する町でもありました。現在、尾花川には、近世文書を中心とした『尾花川親友会共有文書』約五五〇点が伝来していますが、うち約二一〇点が漁業関係の文書です。本展では、この文書群の中から主なものを選んで、江戸時代の尾花川町の漁業について紹介します。

尾花川漁師が営んだ主な漁法は、大網(地引網)でした。大網は、長さ五〇〇間から八〇〇間(九〇〇～一五〇〇m)もあり、これで鮒などを捕っていました。尾花川漁師は、慶長六年(一六〇二)以来、浦役米を幕府に上納する替りに、明治の初めまで志賀浦での大網漁の権利を保證され、江戸初期には、北は唐崎の松から、南は大津町と松本村境までの沿岸を特権的な漁場としていました。

展示では、この大網漁にスポットをあて、関係の古文書によって、尾花川漁業の盛衰をたどります。



尾花川大網役定書

古都大津・歴史シンポジウム

「近江・大津になぜ都は営まれたのか」を発刊

歴史博物館では、昨年十一月二十二日に、古都大津・歴史シンポジウム「近江・大津になぜ都は営まれたのか」大津宮・紫香楽宮・保良宮」を開催しましたが、その成果を広く皆様方にも紹介したく、三月十五日にそのシンポジウム記録集を発刊しました。

その内容は、まず「大津宮 錦織遺跡(大津宮)・石山国分遺跡(保良宮)」「膳所城下町遺跡(禾津頓宮)」「宮町遺跡と関連遺跡(紫香楽宮)」の最新の発掘調査成果を各発掘担当者が紹介。つづいて、「古代近江の宮都論―渡来人と渡来文化をめぐって―」(井上満郎京都産業大学教授)、「大津宮とその時代」(林博通滋賀県立大学助教授)、「紫香楽宮とその時代―付、禾津頓宮・保良宮―」(柴原水遠男大阪市立大学大学院教授)、「歴史地理学から見た近江の宮都」(金田章裕京都大学大学院教授)の四つの基調講演と討論を収録しました。また参考資料として、遺構・遺物等の写真二三点、関係図面四三点、表二点や、近江・大津の宮都関係年表、文献史料一五二点も収録しており、近江・大津の古代宮都の歴史を知るためには欠かせない基本図書といえるものです。頒布価格は一三〇〇円(送料別)です。お求めは歴史博物館まで。



昨年二月から三月にかけて、当館で企画展「大津事件」を開催した。同展の事前調査の過程で、三重県上野市内から、五三通にのぼる津田三蔵書簡を発見し、その一部は同展でも陳列した。

その後一年が経過した現在、他の所蔵者から提供を受けた津田三蔵書簡も含め、全七六通分の翻刻を完了した。記された時期は、明治六年（一八七三）四月十日から同二十四年四月七日、実に大津事件発生一ヶ月前までの、一九年間に渡っている。その全貌は、平成十六年度発刊の『大津市歴史博物館研究紀要』第一号において発表する予定だが、今回、その一部を紹介することにした。

さて大津事件における津田三蔵の犯行動機には、彼自身が持つ西南戦争の従軍体験が、大きな意味を持つていたのではないかということは、企画展の図録や関連講座でも触れた。今回翻刻した津田書簡のなかに、西南戦争が勃発した明治十年のものは一〇通が残されている。

明治十年二月二十二日、西郷軍は、政府軍が守る熊本鎮台（熊本城）に攻撃を開始し、西南戦争の火蓋が切られることになる。その六日後、津田は二月二十八日付けで、兄貫一に宛て「九州辺ハ

何か沸騰^{かたかた}之旨、過ル念三日（二十三日の意）ノ命令ニ、開戦ニ及ビ候趣キ」と書き送っている。津田が当時配属されていたのは、金沢第七連隊第一大隊で、西南戦争時は、別働旅団として、三月二十日、熊本県日奈久（現八代市）に上陸、熊本城を包囲する西郷軍の背面を衝くことになるが、それから六日後、津田は、葦北郡大野村で、左手に貫通銃創を負い入院した。

彼は負傷後、長崎に移されたようだ。残された津田書簡からは、退院から戦争が終結して凱旋するまでの彼の行動がうかがわれる。まず明治十年五月二十九日付けの兄貫一宛書簡によると、彼は五月二十日に退院したあと「長崎御軍運輸局」で不足物品を受け取り、長崎市内に一泊。翌日、船で対岸熊本の「肥后百貫運輸局」に到着、さらに熊本本営に出頭、同二十六日には、船で鹿児島に渡り第一旅団の本隊に復帰した。復帰後の津田が、戦場を駆け巡ったであろうことは、やや興奮気味に記された彼の書簡からも想像できる。

① 官軍城ノ裏手ノ山ヨリ甲月川（甲突川）ニ沿テ胸壁ヲ築キ、軍艦ハ該川ノ入江スル処、鹿児島港ニ在テ迭ニ対向時罵詈ヲ極メ砲撃ス

（五月二十九日付け書簡）

② 過日官軍夕景ニ火花數十本打上ゲ、実ニ万人ノ眼ヲ喜シム、賊軍此火花ヲ望テ呐喊囂々、賊山上ヨリ火花ヲ目的ニシ、大砲五門交ル々々放（砲）撃ス（中略）恰モ万星一時ニ降流スルガ如キ（六月十六日付け書簡）

このような戦場の様子とともに、津田は、西郷隆盛、あるいは西郷軍に対しても感想を記している。まず、先に引用した二月二十八日付けの書簡だが、そこでは、金沢の不平士族の行動を非難し、「西辺（西郷軍）ノ旗色方好クナレバ、随分暴起スル馬鹿モアリマシヨウ、当地（金沢）ノ士族ハ至テ懦弱ニシテ（中略）彼ノ熊本如キ暴動ノ十分ノ一モ出来兼候」と記している。西郷軍の勢いは、政府高官にとつて驚異に映っており、三蔵もまた、それと同様の受け取り方であったようだ。

しかしこの評価も、彼が実際に従軍し、西郷軍と向き合うにしたがつて、微妙に変化してくる。八月三十一日付けで、三蔵が母ききに出した書簡では、「賊徒（西郷軍）ハ山野に潜伏し、生き長らえようとしているだけで、政府軍と戦う様子はなく、隙を見ては食糧を奪い取るという有様で、

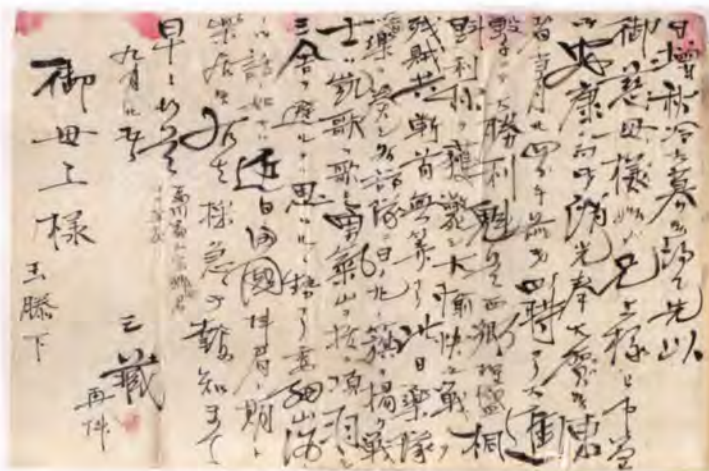
「恰モ草賊ノ体裁（裁）ニ異ナラス」と歎いてい
る。さらに津田は統けて、

実ニ可憐ノ草賊ニ非ズヤ、愚案ヅルニ、西郷
氏ハ昔日ノ忠臣ニシテ、国家ニ益スルコト並
なく知ル処、為之一時人望ヲ得ルコト亦該
氏之右ニ出ルコトナシ、然ルヲ今、反賊ニシ
テ天下ノ兵ヲ請ケ、俵坂（田原坂）ノ一戦大
ニ敗走シ、為之八代口ノ戦ヒモ一時ニ敗走、
此戦状ヲ以テ、該氏ノ目的ノ達スルト不達ハ
判然 燎々タリ、然ルヲ、西郷氏タル者、野
山ニ潜逃レテ日一日モ生ヲ盗ムハ、昔日人望
ヲ得ル西郷氏ニ非ル也、定メテ狂氣ノ西郷氏
ト察スルモ理ナキニ非ンヤ（後略）

ここで津田は、西郷のことを「昔日ノ忠臣」で
あり、集める人望も、彼の右に出る者は無いと、
敬意をはらってはいる。しかし、西郷軍が、ただ
逃げまどうばかりの「草賊」と、津田の眼に映つ
たとき、西郷への評価は大きく変化し、「狂氣ノ
西郷氏」だとまで、言つてのけるのである。たび
かさなる政府軍の勝利と、西郷軍の敗退のなかで、
「西郷神話」はもろくも崩れ去っていく。

津田はさらに、同年九月二十五日付けの母宛書
簡で、次のように書き送っている（写真下）。

（前略）当月廿四日午前第四時ヨリ大進撃ニ
テ大勝利、魁首西郷隆盛、桐野利秋ヲ獲シシ



津田三蔵書簡 明治十年九月二十五日付

大愉快之戦ニテ、残賊共斬首無算ナリ、此
日楽隊音楽ヲ奏シ、各部隊ニ日ノ丸ノ旗ヲ掲
ゲ、戦士ハ凱歌ヲ歌ヒ、勇氣山ヲ抜ク（後略）
津田は、政府軍が西郷を捕えたと記しているが、
西郷は自刃したらしく、首級は確認され、遺体は
鹿児島浄光明寺に埋葬された。津田が書簡中「大
愉快之戦」と表現したのには、長きに渡った従軍

が、これでようやく終わるといふ解放
感もあつただらう。また強敵と思ひ込
んでいた西郷軍に勝利したという、い
しれぬ感動もあつたのだらう。

彼は、九月二十九日午後四時頃、鹿
児島港から船で神戸に着く。そのとき
の気持ち、津田は「上陸後万自由ヲ
得、恰モ別世界ニ蘇生スル心地仕、上
陸後愉快ヲ相極罷募り候」と、端的に
感動を表現している（十月二日付け母
宛書簡）。

津田は、凱旋の翌明治十一年、西南
戦争出征の疲れからか、病氣により入
退院を繰り返すが、そのさなかの十月
九日、勳七等と褒賞金一〇〇円が下賜
される。そして明治十五年一月九日、
一〇年間に及んだ長い軍隊生活を終え
同年三月十五日、三重県巡査を拝命。
以後、津田は、西南戦争の従軍時とは
比すべくもない、淡々とした巡査生活
を送るなかで、大津事件を約一ヶ月後
に控えた明治二十四年四月、「西郷生
存」という、突拍子も無い記事を新聞
で知ることになる（詳細は前記「研究
紀要」に譲る）。

（樋爪 修）

大津歴史博だより No.54

平成16年3月25日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100

ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>

R100